

「感じ方の違いを伝え合うことで、新たなよさや面白さを感じ取る」姿

題材名 「見つけて 感じて」【3／3時】

本時の目標 乾いてできた木工用ボンドの模様を様々な写真に重ねたり、重ねた写真の見え方の違いについて、感じたことを伝え合ったりすることで、ボンド板を通して見える写真の新たなよさや面白さを感じ取ることができる。（鑑賞の能力）

本時の授業について

木工用ボンドを使った造形遊びを、絵の表現につなげることを意識した鑑賞の授業です。

子どもは、前時で体全体の諸感覚を働かせながら作成した「模様が見えなくなったボンド板」の凹凸の面に触れたり、友達の写真や外の景色、教師が準備した様々なジャンルの写真を透かして見たりしながら、ボンド板を重ねてできる新しい世界に感動していました。例えば、波模様のボンド板を写真に重ねることで、写真の見え方や被写体のイメージが変わる面白さを感じ取っていました。さらに、友達と交流することで、個々のイメージを広げたり深めたりすることもできました。

授業の振り返りでは、「自分が描いた絵にも、ボンドをのせたら面白そうだな」と、新たな表現につながる感想を持った子どももいました。ボンド板は、子どもの表現の幅を広げたり、学習意欲を引き出したりするものとなりました。



ボンドを使った造形遊び(前時)

ぬるぬるしていたボンドが固まると、でこぼこになるんだね。

乾くとピカピカの透明になるんだね。

うわっ！白いところが残っていて、サンタのおじさんのような顔になってるよ。

子どもが扱いやすいように、サイズや素材（透明で軽いシート）を使っています。

こっちから見ると、みんなの顔が歪んで見えるよ。

このボンド板をいろいろな写真に重ねると、どんな風に見えるかな？

子どもが感じたことを伝え合う場を設定することで、子ども自身がやってみたくて自ら見付け出すことができました。

子どもの感性を引き出す手立て

造形遊びでつくったボンド板は、子どもにとって大変魅力的なものとなり、子どもの主体的な取組を促しています。



(大介さん) いろいろな模様で試してみたいな。

(大介さん) にらみつけているようなライオンも、食事の後で、のんびりしているようだ。

(雅敏さん) えっ？ぼくは、獲物のおいがプーンとしてきて、今にも捕まえようと集中しているように感じるよ。

(大介さん) そうかな？ ゆらゆら揺れているみたいで、ゆっくり眠りたいような感じがしてこない？

自分のボンド板に様々な写真を重ね合わせる子ども同士の交流が、一人一人の子どもの感性を揺さぶり、イメージを広げる手立てとなっています。

(雅敏さん) 人によって感じ方が違って面白いなあ。

子どもは、ボンド板を重ねた写真を鑑賞することにより、自分の視覚や触覚などの様々な感覚を働かせていました。教師が、異なる模様のボンド板を子どもに持たせ、教室中に貼られた様々なジャンルの写真に重ねて見る鑑賞活動を通して、自分と友達の感じ方の違いに気付き、新たな発見の中から写真の見え方によさや面白さを感じ取ることができました。また、写真では感じられないにおいや音にまで想像を膨らませるなど、子どもが働かせている豊かな感性は、教師が対話を通して共感することで、さらに磨かれていきます。「造形遊び」「鑑賞」「表現」のつながりを意識することも重要です。

(克哉さん) 「ウー」って、うなっているみたいだね。

(ちか子さん) ギザ模様に重ねた方が、「ウー」って、うなっているみたいだよ。

(克哉さん) 同じライオンでも、重ねる模様によって感じ方が違って面白いなあ。あっ、いいこと考えた！ぼくも絵を描いて、その上にボンドで模様を描いたら面白そう！

「描いたり、味わったりを繰り返すことで、水墨画表現の豊かさを実感する」姿

題材名 「墨が生み出す豊かな世界」 【5/13時】

本時の目標 運筆の速度や墨の濃淡などといった技術的な視点から、「竹」の描き方を考える活動を通して、水墨画のよさを味わうことができる。(鑑賞の能力)

本時の授業について

本時は市内在住の水墨画家がこの授業のために制作した参考作品を、子どもが鑑賞し、表現につなげることを通して、自分の見方や感じ方を広げる授業です。まず、各自が画家の作品の制作手順や調墨などについて推測し、実際に自分で模写をした後、小集団になって自他の作品を鑑賞し合い、互いの表現のよさを味わいました。

画家が描いた作品を鑑賞し、造形的な特徴や美しさを感じたり、描き方を想像したりすることを通して、「こんな力強さはどうしたら出せるのだろう」とか「こんなに優しい色合いを墨だけで表現できるんだ」といった自分なりの美しさを発見するとともに、「やってみたい」という思いを持ちはじめ、主体的に描くことができました。

また鑑賞し合う場面では、各自が着目した、運筆の速度、墨の濃淡、筆の使い方等の技術的な視点を持ち、意見を伝え合うことができました。はじめのうちは「水墨画は二色で表すから難しい」と感じていた子どもも、自分が推測した技法を試したり、仲間が着目した造形的な特徴に気付いたりすることで「白と黒だけなのに、こんなに生き生きとした竹を描くことができるんだ」と、水墨画表現の豊かさや奥深さを実感しました。

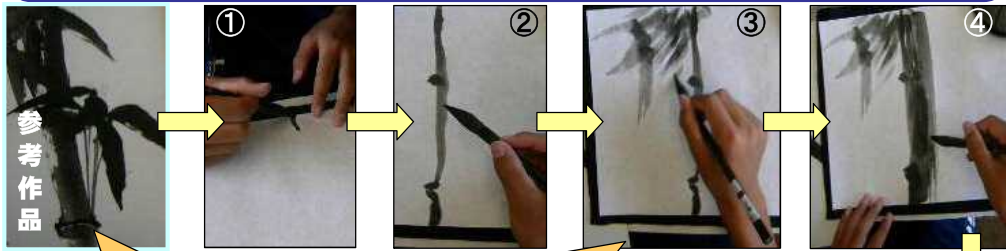


同じ竹を描くのに、みんなの描き方が違って面白。私は、筆を立てたり、寝かせたりして線の強さの違いを出してみたよ。

僕は、左から右へ、だんだん墨が濃くなっていく明暗の変化に着目して、描いてみたよ。

僕は竹の勢いを出したくてわざと水分を少なくしてかすれさせたんだよ。

この作品すごく力強さが出ているよね。水の量をえたの？



「どの子どもにも模写が比較的可能な作品」という視点で、参考作品の制作を依頼しており、子どもに寄り添った指導が行われています。

子どもに寄り添い、表現や活動を記録することで学びの価値の発見につながります。拓馬さんは、墨の濃淡から制作手順を推測して、薄い色を先に置き、次第に墨を濃くしていきました。拓馬さんは、そのことによって竹に立体感が生まれることに気がきます。原田先生は拓馬さんの思いに寄り添い、何に着目し、どう工夫しているのかをその場で見取り、価値付けを行いました。

拓馬さんの作品制作の過程



子どもの見方や感じ方の丁寧な価値付け

原田先生は「どのように描いたら自分がイメージした竹を表現できるのだろうか」という視点を与え、子どもの制作や話し合いを焦点化するという仕掛けをしました。ただ模写をして、そのよさを伝え合うのではなく「どのように描いたら」という視点を与えたことで、子どもの思考が一度「技法」に焦点化され、その結果、多様な表現を生み出すことにつながったのです。

このような場面で教師は、子どもの発言内容と〔共通事項〕との関連について見取り、価値付けることが重要です。例えば「なぜそう感じたのか」「どの部分からそう感じたのか」と子どもに色や形などの根拠を問うことで、その子なりの見方や感じ方を造形的な視点から価値付けることができます。教師の価値観を一方的に押し付けるのではなく、子どもの主体的な学びを促すために、作品のよさや美しさを共有します。一人一人の見方や感じ方を肯定的に受け止め、子どものよさや可能性を引き出すことが大切です。



翔平さんは「かすれ」に着目して表現を試みています。自分が着目した技法で表現することで、学びの実感が生まれます。そして、その試みは鑑賞の視点にもつながっていきます。